人口問題研究　第三卷　第七號

調査研究

平均結婚年齢の變化

岡崎文規

わが國の出生率が、近年、やゝ低下の傾向を示しつゝあるは、こゝに改めて詳説するまでもなく、明白なる事實である。この原因は甚だ複雜にして簡單に解明出來ないが、有力なる原因の一つとして、平均結婚年齢の上昇を擧げることが出來る。されば「人口政策確立要綱」においては、出生增加の一手段として、結婚年齢の引き下げを強調してゐるのである。

平均結婚年齢は次第に上昇しつゝありといはれてゐるが、その上昇は如何なる推移を辿つたかについて觀察しようとおもふ。

內閣統計局の公表してゐる平均結婚年齢は算術平均によるものであつて、明治三十三年以降、毎十年の算術平均による平均結婚年齢を夫妻別に示すと左の如くである。

	夫の平均結婚年齢	妻の平均結婚年齢
明治三十三年	二七・六六歳	二三・〇六歳
明治四十三年	二八・六五	二三・九八
大正九年	二九・一七	二四・二六
昭和五年	二八・八七	二四・〇七
昭和十三年	二九・九八	二五・三四

右の表でみると、昭和五年における平均結婚年齢は、夫妻共に、大正九年における平均結婚年齢よりもやゝ低くなつてはゐるが、大體の傾向としては次第に上昇しつゝあることを明らかに看取することが出來る。平均結婚年齢は、明治三十三年に較べて昭和十三年には、夫において二・三二歳、妻において二・二八歳づつ上昇したのである。

この上昇は、算術平均によつて計算せられたる平均的の値であつて、それぞれの結婚者の結婚年齢がすべて一樣にこれだけ上昇したといふのではない。場合によつては、ある年齢階級において最も多くみられる結婚者の割合は、明治三十三年と昭和十三年とでは殆ど變化なきにもかゝはらず、明治三十三年に較べて昭和十三年には、比較的に若き年齢階級において結婚した者の割合が減少し、そして比較的に高き年齢階級において結婚した者の割合が增加したことに平均結婚年齢上昇の原因があるのかも知れない。

算術平均によつて平均結婚年齢の推移を觀察する場合には、かゝる疑問が生じ易い。

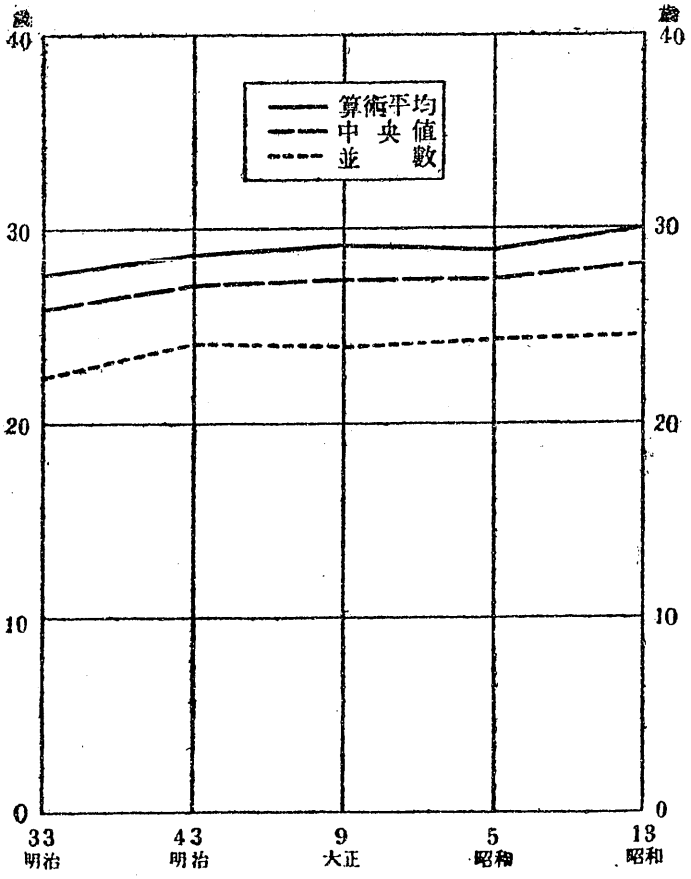
そこで算術平均による平均結婚年齢の推移のほかに、結婚年齢別による結婚數をその大さの順序に配列し、その中央に位して全體を二等分するところの値すなはち中央値の推移はどうなつてゐるか、また結婚年齢別にみて結婚數の最大である點すなはちモード（並數）の推移はどうなつてゐるかを明らかにしてみる必要がある。

明治三十三年以降、毎十年の結婚年齢別結婚統計に基いて、その中央値および並數を計算式によつて求めた。いま、これを算術平均による平均結婚年齢と對比して示せば左の如くである。

	夫の平均結婚年齢			妻の平均結婚年齢		
	算術平均	中央値	並數	算術平均	中央値	並數
明治三十三年	二七・六六歳	二五・九二歳	二三・四四歳	二三・〇六歳	二二・〇一歳	一九・九一歳
明治四十三年	二八・六五	二七・一一	二四・〇三	二三・九八	二二・七六	二〇・三二
大正九年	二九・一七	二七・四一	二三・八九	二四・二六	二二・七五	一九・七三
昭和五年	二八・八七	二七・三三	二四・二五	二四・〇七	二二・八〇	二〇・二六
昭和十三年	二九・九八	二八・一六	二四・五二	二五・三四	二三・六九	二〇・三九

右の表によつて、まづ夫の平均結婚年齢についてみると、いづれの年次においても、算術平均が最も高く、中央値これに次ぎ、並數が最も低くなつてゐる。例へば昭和十三年についてみれば、夫の平均結婚年齢は、算術平均では二九・九八歳であるが、中央値では二八・一六歳、並數では二四・五二歳である。算術平均と中央値との差は大して大きくはないが、算術平均と並數との差は五・四六歳にも達してゐる。すなはち並數の示すところによれば、昭和十三年における男子結婚者數を結婚年齢別にみると、二四・五二歳のところに最も多く現はれてゐるのである。しかるに算術平均による平均結婚年齢はこれよりも五歳以上も高くなつてゐるのは、二四・五二歳以上の結婚者數が相當に多いことに原因してゐる。

こゝで特に問題にしようといふ點は、左の平均結婚年齢を算術平均、中央値および並數をもつて示した場合にみられるその差同よりも、明治三十三年以降、算術平均による夫の平均結婚年齢は次第に上昇の傾向を示したが、中央値および並數においても同樣の傾向がみられるかどうかといふことである。いま、これを圖示すれば左の如くである。



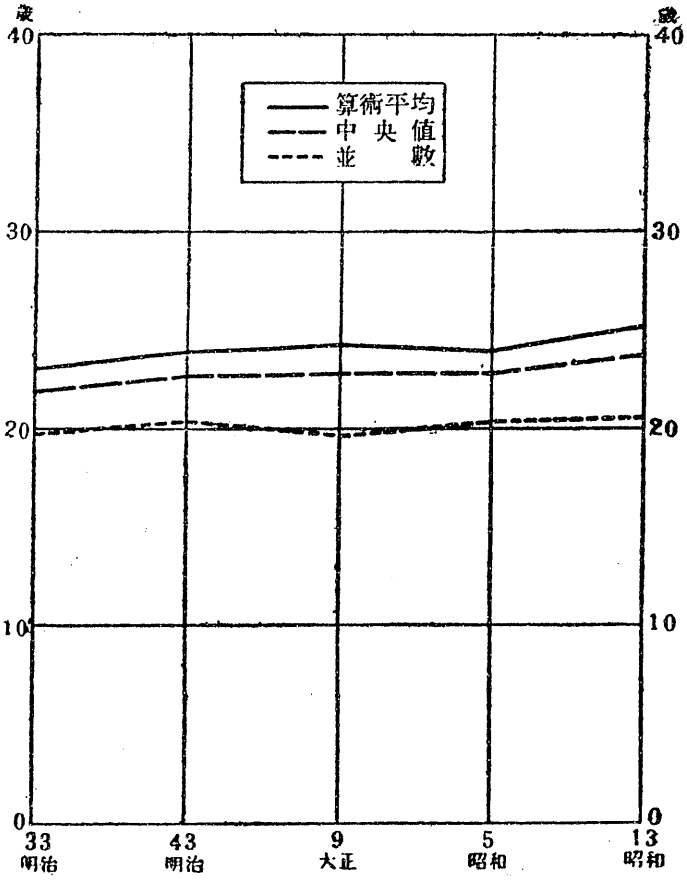
右の圖表でみると、明治三十三年以降、算術の平均値が次第に高まつてゐる如く、中央値および並數も亦次第に高まつてゐることを明らかに看取することが出來る。算術平均の上昇と中央値の上昇とはほゞ平行的であるに

反して、並數の上昇傾向はやゝ緩慢である。これによつてみれば、夫の結婚年齢は、時の經過につれて、算術平均的に高まりつゝあるばかりではなく、結婚年齢別による結婚數をその大さの順序に配列し、その中央に位して全體を二等分する値、ならびに結婚年齢別にみて、結婚數の最大である點も、時の經過につれて次第に高まりつゝあるのであるから、夫の結婚年齢は全般的に次第に高まりつゝあるものとみなければならない。換言すれば結婚者總數中、その一部の者が特に晩婚になつたといふのではなく、全般的に結婚年齢が遲延する傾向があると想像せられる。たゞ並數の上昇傾向は、算術平均又は中央値の上昇傾向ほど大でない。

次に妻の平均結婚年齢についてみると、夫の場合におけると同樣、算術平均が最も高く、中央値これに次ぎ、並數が最も低くなつてゐる。例へば昭和十三年についてみれば、妻の平均結婚年齢は、算術平均では二五・三四歳であるが、中央値では二三・六九歳、並數では二〇・三九歳である。算術平均と中央値との差は二歳弱であるが、算術平均と並數との差は約五歳に達してゐる。すなはち昭和十三年における女子結婚者數を結婚年齢別にみると、並數では二〇・三九歳のところに最も多く現はれてゐるのである。しかるに算術平均による平均結婚年齢はこれよりも約五歳も高くなつてゐるのは、夫の場合と同一の理由により、二〇・三九歳以上の結婚者數が相當に多いからである。

更に明治三十三年以降、妻の平均結婚年齢の上昇傾向を、算術平均、中央値および並數について、それ〴〵圖示すれば下の如くである。

下の圖表でみると、算術平均は、時の經過につれて次第に上昇してゐる、中央値は、算術平均とほゞ平行的の推移を辿つてゐる。並數は大正九年にはやゝ低減してゐるが、しかし全體としてはやはり上昇の傾向にある。たゞその上昇傾向は、算術平均或ひは中央値の場合の如く大でない。



この事實から判斷すると、平均結婚年齢の上昇は、結婚者總數中、その一部の者が特に晩婚になつたといふのではなく、夫の場合に照應して、妻の場合にあつても、全般的に結婚年齢が遲延の傾向にあるものと認められるのである。